

万葉の川心まんようかわごころ

横浜市立矢向小学校教諭 澤井園子

宇治川にして作れる歌

(巻第九 一六九九番歌)

巨椋おほくらの 入江響とよむなり 射目人いめひとの

伏見ふしみが 田井たにいに 雁渡かりるらし

森に入り、早朝の川に釣り糸を垂らす。流れを読み、まるで今虫が川に落ちましたかのような動きをつけて、魚の前に餌をちらつかせる。そこに君がいることは、分かっている。竿から感じる魚の様子に意識を集中させ、息をひそめる。連れ合いが教えてくれたこのわくわくした感じに、今は息子もはまっている。「部活動」という名の青春に入り、なかなか時間が取れなくなってきたが、旅に出ようかと誘うと必ず「釣りがしたい」と言ってくる。「うまいもの」と「温泉」と「釣り」がセットなら「家族に参加」の余地があるらしい。贅沢だ。さて、誰が最初にヒットするのか。そういえば、久しぶりに聴いた若き日のアイドルの歌に、こんなフレーズがあつてとても懐かしかった。「誰よりも最初に愛を射止めたのよ。」狙った獲物は外さないとか、ボーイハントとか、狩猟系の言葉が今なぜか目新しく感じられる。肉食系、草食系と人それぞれだが、子どもたちにはせめて魚が切り身で泳いでいないことだけは教えたいものだ。釣つてさばく、射止めてほうる(余すところなく解体する)など、当たり前の人の営みを言葉とともに次の世代に伝えたいと思う。多くの祭りが見せてくれるように、万葉集がしてくれたように、大切なものを伝承する。しみじみとそんな歳になつてきた。

「巨椋の池の入り江に鳴き声が響いているようだ。射目人が伏す伏見の田に雁が渡つて来ているらしい。」射目とは鳥獣を射るために猟師が身を隠す設備



荒見神社内にある歌碑

である。獲物から狙っていることが分からないように射目の影に身を伏せる。伏せて隠れながら好機を伺い、じつと見る。それが「伏見」の枕詞になっている。伏見の田に雁が多く渡つてきて、入り江に舞い、水をたたえた雄大な景色の中、季節を感じさせるあの鳴き声が響き渡る。「響む」が派生して「どよめく」という言葉が今もある。また、射目を立てて動物の通つた足跡を調べ、その辺りをいづごろ動物が通りそうかを推測することは「跡見」という。言葉を調べていくという新しい発見があつて、いつも驚きが連鎖する。

宇治川が京都盆地に流れ込むところは、京都盆地の中でも最も低いところに位置していた。かつて木津川、桂川との合流点の上流側にかけて広大な遊水池を形成しており、これが巨椋池だった。古代、中世を通じて、水上交通の中継地として大きな役割を果たしたという。池というより湖に近く、蓮の花でも有名である。巨椋池は、伏見城や周辺地域を水害から守るため行われた豊臣時代の築堤工事で行くつもの池に分離され、やがて昭和の頃には干拓されて農地となる歴史をたどる。この歌の詠まれた場所は不明だが、写真は京都府久世郡久御山町の荒見神社内にある歌碑である。

結局釣れないまま、夕方になった。川の魚はとても賢い。だからこそ面白い。当たりはある。早朝と夕方は魚にとつてもご飯時だ。陽が傾いていく。そろそろ終わりか、あと少し、そろそろ諦めるかのその時だった。

「キターッ。」

だから釣りはやめられない。いや、釣れなくてもやめられない。川との出会いは流れのように、世代を越えて、止まらない。